様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３１０１７７

研究課題名（和文）アジア・太平洋戦争および現代世界における大規模暴力をめぐる総合的比較研究

研究課題名（英文）General Comparative Studies between Asia-Pacific War and Massive Violence Today

研究代表者
中野　聡（NAKANO, Satoshi）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：００２２７８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,600,000円、（間接経費）　4,080,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究プロジェクトは、アジア・太平洋戦争における大規模暴力の発生の構造から戦後における法的正義・記憶・回復・和解などをめぐって日本において展開してきた研究成果を、現代世界の他の大規模暴力をめぐる海外の研究と交流させることにより相互の研究の発展に貢献することを目的として実施された。
　研究期間内に国外・国内で研究交流の国際研究集会を実施するとともに当該分野の若手研究者の育成にも重点をおき、ますます実践的な重要性をましつつある本課題について今後の研究のさらなる発展に結びつけるための研究者ネットワークの形成を実現した。

研究成果の概要（英文）：　This research project aims at contributing to the development of both the Japanese scholarship on the Asia-Pacific War and the global scholarship on the cases of massive violence in the contemporary world primarily by exchanging the achievements of both sides of the scholarship on the genesis of massive violence, issues of transitional justice, memory, rehabilitation, and reconciliation in the postwar/post-violence society.
　The research project have organized several international meetings of scholars for the purpose of scholastic exchange. It also has put emphasis on encouraging graduate as well as post doctoral scholars on the field, thus accomplished the formation of scholastic network contributing to further development of the global research on the issue of genesis and aftermath of massive violence in the contemporary world, which is of increasing importance in the world today.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：地域間比較研究　政治学　歴史学　地域研究　社会系心理学　国際研究者交流　アジア・太平洋戦争

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者の中野聡が過去に分担者・代表者として参加・組織してきた共同研究の蓄積および人的ネットワークの延長線上で着想したものである。とりわけ一事例としてのマニラ戦（1945 年 2～3 月）に対象を絞り、これを「実像」と「記憶」の両面から学際的・総合的に検討した「マニラ戦の実像と記憶：平和のための地域研究」（基盤研究(B)・海外学術調査、2007-2010 年度）をへて形成した研究者ネットワークと研究成果から、個別研究の成果をふまえたうえで複数の大規模暴力を比較史的に扱うこと、海外・異分野において研究交流を行い、その成果を個別研究にフィードバックすることが有効であり必要であるという認識に到り、アジア・太平洋戦争史と現代の大規模暴力を対象とする研究を交流させるプロジェクトの着想に至ったものである。

２．研究の目的

本研究は、日中戦争における治安戦と南京事件（笠原十九司）、シンガポール大検証をはじめとするマレーにおける華人虐殺（林博史）、マニラ戦およびフィリピンにおける戦争犯罪・戦犯裁判（中野聡、永井均）などアジア・太平洋戦争における大規模暴力の個別事例について研究実績をもつ研究者が、アジア・太平洋戦争史研究の第一人者である吉田裕、トラウマ研究の先端的存在である宮地尚子とともに、現代世界の大規模暴力をめぐる異分野の研究者と交流することを通じて、現代世界における「真実と和解」プロセスの構築に寄与する実践的な比較研究としてのアジア・太平洋戦争史の可能性を開拓することを目的とした。

具体的には、①大規模暴力をめぐる発生の構造の比較、②法的正義・「真実と和解」プロセスの比較の観点からアジア・太平洋戦争史を捉える視点と方法を確立し、その成果を学界・社会に還元していくことをめざした。

３．研究の方法

本研究は、アジア・太平洋戦争および現代世界における大規模暴力について、その発生の構造から「戦後」における「真実と和解」プロセスまでを対象とした比較研究を、歴史学・政治学・人類学・社会精神医学などを含めた学際的研究として展開するために、共同研究として組織された。

具体的には、研究代表者（中野聡）および 6 名の連携研究者（吉田裕、宮地尚子、林博史、永井均、笠原十九司、栗田禎子）を中核として、国内外の研究協力者および公募により 2 名の若手研究者を共同研究に参加させることで、次世代の研究者ネットワークを構築することに勉めた。さらに研究期間を通じて中野は「真実和解」プロセスの実践・研究と取り組む海外研究協力を新規に開拓してネットワークの構築に勉めた。

本研究計画は、日本と海外研究協力者間の討議と研究情報の交換そして研究成果の国際的な社会還元をめざした。このために機動的なワークショップの運営を心がけ、日程調整のうえ少人数の共同研究者が海外渡航または来日して、海外研究機関および一橋大学でワークショップを開催して研究交流のネットワークを構築する方法をとった。

４．研究成果

（１）2011 年度（2011 年 4 月～2012 年 3 月）の研究計画実施概要とその成果

①「真実和解」の研究・実践プロセスに関するフィールド調査・ネットワーク構築事業――研究代表者の中野聡がアメリカ合衆国（2011 年 8～9 月）、フランス（同 11 月）、韓国（同 11 月）、カンボジア（2012 年 3 月）、中国（同 3 月）において、連携研究者・永井均がフィリピン（2011 年 8 月）、連携研究者・栗田禎子（2011 年 7 月）がドイツにおいてそれぞれ調査を実施した。

②若手研究協力者の公募を実施し、京都大学大学院文学研究科博士後期課程院生の高誠晩氏（研究テーマ：韓国・済州道および沖縄における大規模暴力をめぐる記憶の再編と紛争後社会における共同体の創造）と一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程院生の荒沢千賀子氏（スペインの内戦・独裁、アジア・太平洋戦争の経験から―被害と加害のはざまで大規模暴力を考える）を本事業における研究協力者とすることを決め、それぞれ 2011 年度を通じて高誠晩が韓国において、荒沢千賀子がスペインにおいてフィールド調査を行った。

③海外ワークショップとして、上記①とも重なるが、中野が 2011 年 11 月にフランスのパリ第３大学で講演シンポジウム（マニラ戦の記憶をめぐって）を実施し、2012 年 3 月には中野と連携研究者の笠原十九司および海外研究協力者のヤン・ダーチン（楊大慶）、リカルド・ホセ、リディア・ホセを中核とする訪問団を組織して、南京大学中華民国史研究センターにおいて日中米比４カ国合同の研究会議（南京事件とマニラ戦をめぐって）を開催した。

④以上を通じて、2011 年度の主要な課題であった研究交流（ネットワーク構築）・研究調査について順調に計画を進めることができた。とりわけ、南京大学中華民国史研究センターにおける研究会議では、南京事件・マニラ戦研究をめぐって中国とフィリピンの研究者を初めてネットワーキングすることに成功しただけでなく、第２次世界大戦史研究を現代世界の大規模暴力をめぐる真実と和解の実践・研究にどのように結びつけてい

くかという本プロジェクトの中心課題について日中比で豊かなディスカッションを実現することができた。

（２）2012 年度（2012 年 4 月～2013 年 3 月）の研究計画実施概要とその成果

①「真実和解」の研究・実践プロセスに関するフィールド調査・ネットワーク構築事業――研究代表者・中野聡がルワンダ共和国（2012 年 5 月）、ポーランド・ドイツ・フランス（同 8-9 月）において、永井均がフィリピン（2013 年 3 月）において、笠原十九司・林博史・宮地尚子・荒沢千賀子（若手研究協力者）がスペイン（2013 年 3 月）においてそれぞれ調査を実施した。

② 若手研究協力者による研究として、それぞれ 2012 年度を通じて 高誠晩が韓国において、荒沢千賀子がスペインにおいてそれぞれフィールド調査を行った。

③ 海外ワークショップとして上記①とも重なるが、2013 年 3 月に笠原十九司・林博史・宮地尚子・荒沢千賀子による訪問団を組織して、スペインのオビエド大学等において日本・スペイン合同の研究会議（過去をみつめなおす:日本とスペインの大規模暴力と記憶）を開催した。

④ 2012 年度の特筆すべき成果として、本研究課題と直接重なるフランスの主要な学術誌『両大戦と現代の紛争』に中野聡・吉田裕の 関連論文が仏訳掲載された。さらにスペイン内戦・独裁下の大規模暴力の歴史の掘り起こしと記憶に取り組むアストゥリアスの市民およびオビエド大学の研究者と日本の研究者を初めてネットワーキングする会議の開催に成功し、現代世界の大規模暴力をめぐる真実と和解の実践・研究にどのように結びつけていくかという本プロジェクトの中心課題について豊かなディスカッションを実現することができたことなど、ヨーロッパとの間で本研究課題に関する研究交流の実績をあげることができた。

（３）2013 年度（2013 年 4 月～2014 年 3 月）の研究計画実施概要とその成果

① 研究最終年度の事業として、まず戦争トラウマ研究に焦点をあてた国内シンポジウム （「心の傷をめぐる歴史経験：語りと追悼」）を 2013 年 7 月に実施した。本シンポジウムでは若手研究協力者の高誠晩氏と荒沢千賀子氏がそれぞれ研究成果を報告するとともに、 沖縄戦をめぐる心の傷を主題として講演者として臨床精神科医の蟻塚亮二氏および北村毅氏（早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授）を招聘して、若手研究者を交えた研究討論を行った。

② さらに本研究事業を通じてネットワークを形成したフランス高等師範学校よりクロード・ドブリュー名誉教授、フランスの主要な学術誌『両大戦と現代の紛争 』編集責任者シャンタル・メジェル教授（ロレーヌ大学）およびジャン・シャルル・ダルモン教授（ヴェルサイユ＝サン・カンタン・アン・イヴリーヌ大学)、また国内より有田英也教授（成城大学)、松沼美穂准教授（群馬大学）を招聘した 国際シンポジウム（「大規模暴力の語り方―日仏学際対話の試み」）を 2013 年 9 月に実施した。

③ また研究代表者は、在外研究先のアメリカにおいて本研究プロジェクトに関連して 2014 年 3 月にセントルイス・ワシントン大学で研究発表を行うなど、引き続きネットワーク形成につとめた。2013 年 3 月にスペインのオビエド大学で開催した国際ワークショップとあわせて、各シンポジウムの成果を出版する準備を進めている。

また最終年度の補充調査として、引き続き若手研究協力者の高誠晩氏、荒沢千賀子氏が海外研究調査を行うとともに、永井均氏、あらたに研究協力者をお願いした中原聖乃氏（中京大学講師、マーシャル諸島核被爆者問題の人類学的研究）がワシントン DC において調査を行った。なお、本プロジェクトの研究成果の公開については、若手研究協力者を含めた研究成果の出版を準備中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 48 件）

1) 中野聡、「東アジア」とアメリカ：広域概念をめぐる闘争、歴史学研究、査読有、No.907、2013、15-25
2) Satoshi Nakano 、La gestion des colonies et l' administration militaire dans le sud: le demantelement de l' Empire japonais en Asie du Sue- Est (traduit par Remi Buquet)、Guerres mondiales et conflits contemporains、査読無、249、2013、75-100
3) Yutaka Yoshida、Les champs de bataille et les soldats de la guerre du Pacifique en Asie (traduit par Remi Buquet)、Guerres mondiales et conflits contemporains、査読無、249、2013、49-74
4) 林博史、占領下沖縄における米兵による性犯罪、戦争責任研究、査読無、No.80、2013、58-68
5) 林博史、米軍基地建設と住民強制退去：その植民地主義と人種主義、アメリカ史研究、査読有、36 巻、2013、83-103
6) 林博史、ニュージーランドと戦犯裁判：戦犯裁判終了へのイニシアティヴ、自然・人間・社会、査読無、54 巻、2013、51-70
7) 永井均、永井均氏インタビュー：キリノ大統領の苦悩の決断、アジア時報、査読無、44 巻 11 号、2013、31-39

8) 栗田禎子、エジプト「六月三〇日革命」とオリエンタリズムの罠：中東社会に対する国際社会のまなざし、歴史評論、査読無、No.763、2013、53-62
9) 宮地尚子、文化とトラウマ、こころの科学、査読無、No.165、2012、22-27
10) 笠原十九司、市民からの東アジア歴史教科書対話の実践：日中韓三国における『未来をひらく歴史』と『新しい東アジア近現代史』の発行、世界、査読無、No.840、2013、45-55
11) 笠原十九司、日本の若者とアジアの若者との歴史対話のために、アジア遊学、査読無、No.150、2012、23-28
12) 林博史、日本軍慰安婦問題の現在、歴史地理教育、査読無、No.798、2012、10-17
13) 林博史、米軍基地の世界ネットワークのなかの日本・沖縄、平和運動、査読無、No.500、2012、4-16
14) 林博史、マニラ戦とベイビュー・ホテル事件、自然・人間・社会、査読無、52巻、2012、294
15) 高誠晩、紛争後社会における大量死の意味づけ：沖縄戦の戦後処理と済州四・三事件の過去清算の事例から、ソシオロジ、査読有、57巻1号、2012、59-74
16) 林博史、日本軍「慰安婦」研究の成果と課題、女性・戦争・人権、査読無、No.11 、2011、6-30
17) 林博史、原爆投下と戦争犯罪追及、戦争責任研究、査読無、No.73、2011、36-39
18) 笠原十九司、歴教協第 29 回中間研究集会報告 日中戦争の実相とは?--日本軍の治安戦と三光作戦、歴史地理教育、査読無、No.778、2011、64-72
19) 栗田禎子、エジプト「民衆革命」の意味するもの、現代思想、査読無、39 巻 4 号、2011、46-51
20) 栗田禎子、エジプト民衆革命：意義・背景・今後の課題、中東研究、査読無、No.511、2011、49-58

〔学会発表〕（計 34 件）

1) Satoshi Nakano、A Dark Truth: Japanese "Kirikomi" attacks in the Battle of Manila, February 3 to March 3, 1945、Colonialism, Ideology, and Genocide in Comparative Perspective: the Long 20th Century、2014 年 3 月 28 日、Washington University in St. Louis（米国）
2) Hitoshi Nagai、The Dilemma between “Anger” and “Forgiveness”: The Decision to Pardon Japanese War Criminals by President Quirino、Philippine Studies Conference in Japan、2014 年 2 月 28 日、京都大学東南アジア研究センター（京都府）
3) Hitoshi Nagai、Establishing Prestige as a New Born Nation: The Philippine War Crimes Trials and their Aftermath, 1947- 1953、Punishing War Crimes after World War II. A Comparative Perspective, Deutsch- japanischer Workshop、2014 年 1 月 7 日～8 日、Historischen Institut der FSU Jena（ドイツ）
4) Hirofumi Hayashi、Review of United Nations’Policy for War Crimes Trials、Punishing War Crimes after World War II. A Comparative Perspective, Deutsch- japanischer Workshop、2014 年 1 月 7 日～8 日、Historischen Institut der FSU Jena（ドイツ）
5) Hirofumi Hayashi 、The Japanese Military “Comfort Women” and International Relations in Northeast Asia、Historical Reconciliation and Prosperity in Northeast Asia: 70 years since the Cairo Declaration、2013 年 12 月 2 日、George Washington University（米国）
6) 林博史、東京裁判とＢＣ級戦争犯罪、2013 年東京裁判国際シンポジウム、2013 年 11 月 12 日～14 日、上海交通大学東京裁判研究センター（中国）
7) 中野聡、大規模暴力の戦後史：「マニラの死」から考える、大規模暴力の語り方：日仏学際対話の試み、2013 年 9 月 13 日、一橋大学（東京都）
8) 宮地尚子、日本でトラウマを耕す、大規模暴力の語り方：日仏学際対話の試み、2013 年 9 月 13 日、一橋大学（東京都）
9) 高誠晩、死後処理の経験知：虐殺以後の済州道から、心の傷をめぐる歴史経験：語りと追悼、2013 年 7 月 20 日、一橋大学（東京都）
10) 荒沢千賀子、”わたしは領事館のたったひとりの生き残り” ―記憶を失って生きた６歳スペイン少女のその後―マニラ戦スペイン総領事館襲撃、心の傷をめぐる歴史経験：語りと追悼、2013 年 7 月 20 日、一橋大学（東京都）
11) 林博史、領土問題と歴史認識、第 12 回「歴史認識と東アジアの平和」フォーラム光州会議、2013 年 5 月 17 日～19 日、金大中コンベンションセンター（韓国光州広域市）
12) 宮地尚子、弾圧とその帰結へのふたつのまなざし：歴史的記憶とトラウマから（日本語講演をスペイン語通訳）、過去をみつめなおす：日本とスペインの大規模暴力と記憶、2013 年 3 月 7 日、オビエド市ヒホン労働者文芸協会(スペイン王国)
13) 笠原十九司、南京大虐殺と“第二の加害”: 日本・中国における犠牲者の記憶を抑圧する政治構造（日本語講演をスペイン語通訳）、過去をみつめなおす：日本

とスペインの大規模暴力と記憶、2013年3月6日、オビエド市オビエド大学歴史的校舎大講堂(スペイン王国)
14) 林博史、日本軍の「慰安婦(性的奴隷)」制度―論争と歴史認識（日本語講演をスペイン語通訳)、過去をみつめなおす:日本とスペインの大規模暴力と記憶、2013年3月6日、オビエド大学ミラン・キャンパス歴史学科（スペイン王国）
15) Hirofumi Hayashi 、The Japanese Military ‘Comfort Women’s Issue and the San Francisco System、Sixty Years of the San Francisco System: Continuation, Transformation, and Historical Reconciliation in the Asia- Pacific、2012 年 4 月 28 日、University of Waterloo, Ontario, Canada（カナダ連邦）
16) Satoshi Nakano 、Battle of Manila: Truths and Memories、Atrocity, Trauma and Memory: Symposium on Experiences of China, Japan and Philippines during and after the World War II、2012年3月27日、南京大学中華民国研究中心（中国）
17) Ricardo T. Jose、Research trends and interests regarding the Japanese occupation of the Philippines 、Atrocity, Trauma and Memory: Symposium on Experiences of China, Japan and Philippines during and after the World War II、2012年3月27日、南京大学中華民国研究中心（中国）
18) Lydia N. Yu Jose、Elite Remembrance of the Battle for Manila and Japan’s Soft Power、Atrocity, Trauma and Memory: Symposium on Experiences of China, Japan and Philippines during and after the World War II、2012年3月27日、南京大学中華民国研究中心（中国）
19) Satoshi Nakano 、Ways to Tell the Unspeakable: <Death of Manila> in the Post-World War II Filipino Memories and Imagination、Une conférence donnée par M. Satoshi Nakano、2011 年 11 月 12 日、Université Paris III -Sorbonne Nouvelle, Paris（フランス）

〔図書〕（計 18 件）

1) 笠原十九司、汲古書院、第一次世界大戦期の中国民族運動: 東アジア国際関係に位置づけて、2014、820
2) 永井均、講談社、フィリピンＢＣ級戦犯裁判、2013、294
3) 宮地尚子、岩波書店、トラウマ、2013、256
4) 中野聡、岩波書店、東南アジア占領と日本人、2012、352
5) 吉田裕、校倉書房、現代歴史学と軍事史研究、2012、366
6) 林博史、吉川弘文館、米軍基地の歴史：世界のネットワークの形成と展開、2012、202
7) 吉田裕、岩波書店、兵士たちの戦後史、2011、294
8) 宮地尚子、岩波書店、震災トラウマと復興ストレス、2011、63

６．研究組織

(1)研究代表者
中野　聡（NAKANO, Satoshi）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：00227852

(3)連携研究者
吉田　裕（YOSHIDA, Yutaka）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：20166979

宮地　尚子（MIYAJI, Naoko）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：60261054

林　博史（HAYASHI, Hirofumi）
関東学院大学・経済学部・教授
研究者番号：80180975

永井　均（NAGAI, Hitoshi）
広島市立大学・広島平和研究所・准教授
研究者番号：40347620

笠原　十九司（KASAHARA, Tokushi）
都留文科大学・文学部・名誉教授
研究者番号：80125814

栗田　禎子（KURITA, Yoshiko）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：10225261

(4)研究協力者
荒沢　千賀子（ARASAWA, Chikako）
一橋大学・大学院
社会学研究科・博士後期課程・院生

高　誠晩（KOH, Sung-Man）
京都大学・大学院
文学研究科・博士後期課程・院生

リカルド・Ｔ・ホセ（JOSE, Ricardo T.）
フィリピン大学・社会科学哲学部・教授

リディア・Ｎ・ユ・ホセ（JOSE, Lidya N. Yu）
アテネオ・デ・マニラ大学・政治学科・教授

楊　大慶（YANG, Daqing）
ジョージ・ワシントン大学・
エリオット国際関係大学院・准教授

中原　聖乃（NAKAHARA, Satoe）
中京大学・社会科学研究所・特任研究員
研究者番号：00570053